

サムエル記下 8 章 1～18 節

2025 年 8 月 20 日(水)

はじめに

本日はサムエル記下 8 章 1～18 節を学びます。前回までは 5 章で、ダビデが全イスラエルの王となったことと、エルサレムを政治的な中心としたこと、6 章では、神の箱をエルサレムに運び上げて、エルサレムを宗教的な中心、あるいは信仰の中心としたことが言われました。そして 7 章では主なる神が預言者ナタンをとおしてダビデと契約を結び、ダビデ王朝を永遠の王朝とすることが言われました。

こうしたことを受けて、本日の 8 章では、実際に、ダビデが王国の基礎を固めたことが言われます。それには二つあります。一つは 1～14 節で「ダビデの戦果」が語られています。ダビデ王の対外政策です。周辺地域の王国や諸民族がダビデの王国を攻撃しないように制圧し、支配したわけです。もう一つは 15～18 節で「ダビデの重臣たち」が語られています。こちらはダビデ王の内政です。王を中心とする官僚組織を作ったことが言われています。これはイスラエルの歴史の中で初めてのことで注目になります。このように 8 章では、ダビデが王国の基礎を固めたことを語っているわけです。以下、下左のダビデの王国の地図を参照しながら話を進めます。



I サムエル記下 8 章 1～18 節の話の流れ。

本日の個所の話の流れを見てみましょう。全体は、すでに触れたように二部構成です。1～14 節と 15～18 節です。まずダビデ王の対外政策を語る 1～14 節を眺めてみましょう。

1 節でペリシテ人を屈服させたことが言われます。彼らはエルサレムから見ると西側の地中海沿岸平野にいました。また 2 節でモアブを討伐し、服従させたことが言われています。彼らは死海の東側の地域にいました。ですから聖書は、ダビデの対外政策を東西の方向の軸でまとめていることが分かります。

3 節はツォバの王、レホブの子ハダドエゼルを討伐したこと、さらに 5 節では Damascus のアラム人を討伐したことが言われています。また 9 節のハマトの王トイはダビデと平和的な関係を結んでいます。これらの国々とその王たちは、エルサレムから見て、北部にいました。

また 13 節では、エドム人を討伐しています。彼らは死海の南の地域にいました。ですから 3～14 節では、ダビデの対外政策を、南北方向を軸にしてまとめていることが分かります。

以上のように 8 章ではダビデの対外政策を

時系列的に語っているのではなく、エルサレムを中心に東西、南北の方向でまとめていることが分かります。そうやって、エルサレムはダビデの王宮があるところであり、その支配のがすべてに及んでいることを示しているわけです。

またこれらの記事は、6 節後半で、「主はダビデに、その行く先々で勝利を与えられた」とあります。それは 14 節後半でも同じく「主はダビデに、行く先々で勝利を与えられた」と繰り返して言われています。ダビデの対外的な戦争が、主なる神の御心に従ってのことであったことが強調されているわけです。このようにして、ダビデの王権が周辺諸国、諸民族にまで及んでいることがいわれています。

次に対内政策です。ダビデは王国を治めるにあたって、従来の各氏族の長老による合議制ではなく、ダビデの王としての意志がよりストレートに伝わるために官僚組織を作りました。それには、軍事、宗教、行政、他民族の監督の三つの部門があったわけです。

以上のことを箇条書きにすると、次のようになります。

1. 8 章 1～14 節 ダビデの対外政策

(1) 1～2 節 東西方向での対外政策

西：ペリシテ人、東：モアブ人

(2) 3～13 節 南北方向での対外政策

北：ツォバの王ハダドエゼル、ダマスコのアラム、
ハマトの王トイ

南：エドム人

2. 8 章 15～18 節 ダビデの対内政策

(1) 15 節 ダビデの統治の基本理念

(2) 16～18 節 ダビデ王の官僚組織

II. サムエル記下 8 章 1～18 節の解説

【1～2 節】

すでに触れたようにサムエル記下 8 章はダビデの対外的な戦いについて、時系列にしたがって語っているのではなく、エルサレムを中心に東西、南北を軸にまとめて語っていました。この 1～2 節は東西の軸で、ダビデによるペリシテ人とモアブ人との戦いの記事です。ダビデはペリシテ人を討伐し「屈服させ」ました。つまりこれまでのようにペリシテ人が、地中海沿岸平野から東に向かって侵攻し、イスラエルの地を脅かすことのないようにしたのです。彼らは、自分たちの五つの植民都市周辺にとどまり続けることになったわけです。

モアブ人討伐については、ペリシテ人のケースと違って、「ダビデに隷属し、貢物を納める」ようにさせたわけです。要するにダビデの王国がモアブを支配したのです。そのためダビデはモアブに対して厳しい態度で臨んでいます。「測り縄」は、元来土地の広さを測量するためのものです。しかしここでは、それを用いてモアブ人の三分の二を殺し、三分の一を生かしたのです。意味は明らかでしょう。モアブ地方の土地に住む者たちが多すぎるので、減らしたということです。そのようにしてモアブの力を削いだわけです。

【3～14 節】

次に南北方向を軸に語ります。まずツォバの王ハダドエゼル討伐です。彼らは、レバノン山脈

とヘルモンの山系の間の谷にあるベロタイという町を拠点としたアラム系の人々です。ハダドエゼルは、北上して「ユーフラテスに勢力を回復しようと行動を起こした」とあります。ですから南にあるダビデの王国に脅威を与えるものではありません。何故、ダビデは軍を派遣したのか。それは、ユーフラテス川沿いの地域を考えると分かります。ハダドエゼルが進軍したのは、かつてアブラハムたちが住んでいたハランを中心とするパダン・アラム地方でした。そこにはまた、ヤコブの妻たちの兄ラバンの子孫が住んでいる地域です。ハダドエゼルは、そこを攻略することになります。おそらくダビデは、ラバンの子孫たちがハダドエゼルによって滅ぼされないように軍を派遣したのでしょう。ただし聖書テキストは、ダビデが軍を派遣した理由については省略しています。とにかくダビデ軍は、騎兵 1700、歩兵 2 万人を捕虜とし、戦車の馬は百頭を残し、後は馬の腱を切って走れないようにしました。さらに 5 節では、ハダドエゼルを援助するため、ダマスコのアラム人が参戦したので交戦し、2 万 2 千を討ちました。そしてダマスコのアラム人に対して守備隊を設置しました。

聖書は、以上のことをまとめて、「こうしてアラム人もダビデに隷属し、貢を納めるものとなった」といっています。具体的には、ハダドエゼルの家臣が携えていた金の盾を没収し、また彼の王都であったベタとベロタイから大量の青銅を奪ったのです。

それに対して遙か北部のハマトの王トイは、ハダドエゼルと交戦中でした。ですからダビデの勝利を聞き、王子ヨラムを遣わし、ダビデの戦勝を祝って「銀、金、青銅の品々を贈った」のです。

それらの戦利品は、ダビデが自分や部下のために使うのではなく、主のために聖別しました。つまり来るべきエルサレム神殿建設の材料としたということでしょう。

なお、12 節にはダビデが征服した民族の名前が書いてあります。その中には「アンモン人」が出てきます。彼らとダビデの戦いの記事はここには直接書いてありません。それは続く 10 章で対アンモン戦の記事があります。それによると「アンモン人の王が死に、その子はハヌンが代わって王となった。ダビデは、「ハヌンの父ナハシュがわたしに忠実であったのだから、わたしもその子ハヌンに忠実であるべきだ」とって、使節を遣わして哀悼の意を表そうとした」とあります。ここから分かることは、ハヌンの父ナハシュの時代に、アンモンはダビデによって征服されていたのでしょう。

13～14 節は南の方面でのダビデの活動が語られています。死海の南からベエルシェバ地方にかけてエドム人がいました。ダビデは彼らを「塩の谷」で討伐しました。そこは死海の南端から広がる谷間です。そこで 1 万 8 千人を討ち滅ぼしたのです。そこに「名声を得た」とあります。これは今までにはない表現です。これは、特にエドム人の略奪の被害を受けるユダ地方の人々の声ではないでしょうか。ダビデは北部方面のアラム人だけでなく、南部方面の脅威であったエドム人を無力化したからです。しかもダビデは守備隊をエドムの全土に置きました。こうしてエドムはダビデ王に隷属することになったわけです。

ところで以上のようなダビデの戦いを今日のわたしたちはどう受け止めたらいいでしょうか。一見すると領土拡大のための戦争に見え、現在の国際秩序からいえばそのような力による外交は認められません。そこで大事なことは、現代の常識でダビデの戦争を裁くのではなく、まずどのような戦争であったのかきちんと理解することです。ダビデの戦争は、イスラエルの地を確実に守るためのものでした。イスラエルの地は神がイスラエルに与えた約束の地です。だからダビデの戦いは、世俗的な王の領土拡張のための戦いと同じではなく、主の御心にかなったものでした。だからこそ、

「主はダビデに行く先々で勝利を与えられた」と告げているのです。つまり主なる神の御支配が、ダビデの王権をとおして実現するための戦いであつたのです。

後に新約聖書においては、主なる神の御支配が、御子イエス・キリストにおいて実現していると語りますが、ダビデの戦争はそのことを遠くから予告しているわけです。そこで心に留めたいのは、ダビデはイスラエルの地を脅かす外敵と戦っていますが、主イエスは罪と死と悪霊と戦い、勝利してくださいました。これは、ちょうど光が闇をはっきりとさせるように、神の子である主イエスの登場によって、人間を根本から隷属させているのが罪と死と悪霊であることが明瞭となったためなのです。

【15～18 節】

ここは、ダビデの内政についての記事です。イスラエルの民は従来、王である神の御支配を、12 部族の長老たちの合議制によって行いました。しかし王国になってからは、そのようなことができません。もしも従来どおりに行くと、神が王を建てることを許したわけですから、王と長老の合議とでどちらに正当性があるのかということで、衝突するわけです。

ですからダビデは、従来の長老たちの合議ではなく、ダビデ王直属の官僚組織を定めたわけです。これによってダビデ王の意思が直接、実施されるわけです。

そのダビデ王の意思とは、「王として全イスラエルを支配し、その民すべてのために裁きと恵みの業を行った」という御言葉に明らかなです。原文で確かめてみると「裁き」は「ミシュパート」、「恵みの業」は「ツァディカー」です。これは「神の義」という意味です。ですからシナイ契約で語られた律法にもとづき支配したということでしょう。

そのためダビデは以下のような官僚を組織しました。

1. 軍事部門 司令官ヨアブ
補佐官ヨシャファト
2. 宗教部門 祭司ツァドク、アヒメレク、ダビデの子たち
3. 行政部門 書記官セラヤ
4. 在留外国人の監督 ベナヤ

以上のようになっています。注目に値するのは、ダビデの子たちです。世俗の王国では、王子たちは軍事部門のトップにいたりします。しかしダビデはそうしませんでした。全員祭司として主に仕える者としたのです。理由は明らかでしょう。ダビデの王権は、神の主権に仕えることで正当性と力を得るものだからです。